

丹後半島におけるチマキザサの刈り取りによる 林床植生の変化

藤井 基弘

キーワード： 里山、チマキザサ、笹葺き屋根、林床管理、林床植生

1. 背景・目的

里山は、かつては日本の原風景として日本人の生活を物質的にも、精神的にも支えてきたが、燃料革命や生活様式の変化の波を受け、棚田や雑木林が荒地や人工林などに变化した。研究対象地の丹後半島の京都府宮津市上世屋でもこれらの影響を避けられずにいる。この地では、1960年代の高度経済成長期前まではチマキザサを屋根葺き材として利用する伝統文化が継承されていたが、1987年には途絶えてしまった。しかし、2004年以降、NPO等により笹葺き屋根の葺き替えが開始し、2008年からは祇園祭の厄除けの粽（ちまき）のためのササ刈りも始まった。本研究では、これらのササ刈りが林床植生にどのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的にした。

2. 研究方法

上世屋地区で活動する団体地域住民を対象に聞き取り調査を行い、2000年以降にチマキザサ（以下ササ）の刈り取りを行った場所や刈り取り方法を把握した。次に、ササの刈り取りに伴う植生への影響を調べるため植生調査を行った。調査区の設定は、聞き取り調査結果に基づき、対照区（非刈り取り区）19ヶ所、刈り取り区41ヶ所とした。各調査区には3×3mの方形区を設定し、ササ刈り取り後の出現植物種、ササの稈高、被度を記録した。

3. 結果と考察

調査の結果、屋根葺き用ササ刈り取りでは、ササ刈り取り前に比べて、刈り取り後では出現種数が増加し、特にウリハダカエデ、コナラ、ネムノキなどの高木性樹種においてその傾向がみられた。低木種・草本種では、ウツギ、クロモジ、タチツボスミレ、チヂミザサなどが出現した（図1）。ササ刈り取りを行わなかった対照区では、チマキザサの被度はほぼ100%であり、オクノカンスゲ、チヂミザサ、ノササゲなどが出現した。経年変化をみても出現種数はほとんど変わらず、低いままであった（図2）。また、ササを刈り取る回数が2回あっても1回目と比べ大きな変化は見られなかった。

粽用のチマキザサを刈り取った方形区では、ウワミズザクラなどの高木種、クロモジ、ゼンマイなどの低木種・草本類がみられ、刈り取りを行っていない方形区よりも多くの林床植物が出現した。一方、対照区の中には、京都府の準絶滅危惧種であるギンランが出現するなど、植物の生息地として一定の役割を果たすものもみられた。

以上のように、ササ刈り取りを継続して行い、屋根材や祭を支える資源として新たに活用することは、山村と都市との交流の橋架けになるだけでなく、植物の多様性や人為的撹乱に適応した植物の生息地としても重要な役割を果たすことが示唆された。今後も森林資源の利用と生態的な評価について継続的な調査を行うことにより、里山における伝統文化と生物多様性の保全のあり方を議論する必要がある。

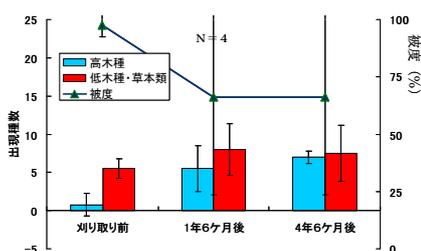


図1 ササ刈り取り前と後の出現植物種数

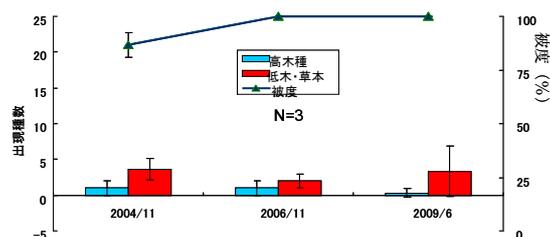


図2 対照区（放置区）の経時変化の出現植物種数